

新しいテーマ



星野 友

九州大学大学院工学研究院応用化学部門
[819-0395] 福岡市西区元岡744
教授, 博士(工学).
専門はバイオ・高分子.
hoshino.yu.673@m.kyushu-u.ac.jp
<https://www.chem.kyushu-u.ac.jp/~cstm/>

[laboratory/laboratory_311.php](https://www.chem.kyushu-u.ac.jp/~cstm/laboratory/laboratory_311.php)

私は2006年に東京工業大学で博士の学位を取得してから、米国で4年間研究を行った。2010年に九州大学の化学工学部門の三浦佳子先生の助教に拾っていただき、2022年からは同大学の応用化学部門にて研究室を主宰させていただいている。

『新しい研究室に移動したら新しい研究テーマを立ち上げるもんや』恩師が常々言っていた研究室の掟である。私が4年生の時に所属した研究室は『新しいテーマ』を立ち上げる力を養うことを重視していた。4年の卒業研究で研究が上手くいっても、いかになくても、修士に入ると全員新しいテーマに取り組む、という教育方針を徹底していた。この掟は、アカデミックで活躍されている同門の先輩も徹底されており、異動後も同じテーマの研究を続けていると先輩からも後輩からも批判される。

今思うとこの掟のお陰で今まで研究者としてサバイブできたのではないと思う。卒論研究では、5キログラムの酵母から数グラムのtRNAを抽出し、生分解性の透明フィルムを開発した。大学院では『酵素のゆらぎと機能を超音波で制御する』という研究を立ち上げ、超音波を照射しながら水晶振動子上でタンパク質間相互作用を計測する装置の設計・制作を行った。いずれの研究でも大した成果を挙げることはできなかったが、このときに味わった『新しいことに挑戦する楽しさ』は今でも仕事の原動力となっている。博士号取得後は、カリフォルニア大学アーバイン校の合成化学の研究室に博士研究員として移動した。博士研究員は短期間で成果を出さないとサバイブできない。そこで、学生のように身につけたタンパク質間相互作用の計測技術を合成高分子に適用することで短期間で新しい研究を立ち上げることを計画し、タンパク質を認識する合成高分子ナノ粒子『プラスチック抗体』の研究を立ち上げた。

九州大学では、化学工学という全くの異分野の学科に所属することになった。ここでも何か新しい研究テーマを立ち上げなくては……と考え当時化学工学分野で大きなテーマとなっていた二酸化炭素分離材料の研究を構想した。その際、学生時代に夢中になった『酵素のゆらぎと機能』を合成高分子で模倣することで新しいタイプの分離材料を実現し、スタッフとともに九大発ベンチャーを立ち上げた。

さて、本稿の趣旨は、『仕事と“私事”』である。依頼文には、『研究者・企業人ならびにその予備軍である学生を対象に、“男女共同参画の視点”を含むメッセージを掲載』とある。上述のように私は新しいことに挑戦することを仕事とする幸運に恵まれたのであるが、それは家族の並々ならぬ協力があってこそである。妻は、定職につかず研究に没頭する私について仕事を辞めて米国に渡り、知り合いがいない異国のコミュニティーに溶け込んで、独力で生活を立ち上げたアントレプレナーである。妻はまた、出産予定日に日本出張を入れる夫に(あまり)文句を言わず海外での単独出産に挑戦するチャレンジャーでもある。九州大学に移動した後も、3人の子供の子育てと週9日(週3日×3人)の習い事の送り迎えをしながら仕事もするスーパーウーマンである。同時に大学宿舍の自治会と子供会、小学校のPTAの役を掛けもちしながら、生活や語学で困っている留学生家族のお世話をする地域の世話焼きお母さんでもある。『新しい環境に飛び込み、新しいテーマで成果を出す』あるいは『社会に貢献する』という実績において質・量ともに圧倒的である。

そんな妻を心よりリスペクトするとともに、家族に感謝をしながら、私も負けじと『新しいテーマ』を考えている。